



Title	日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本正誠と朝鮮語：人物史と著書を通して
Author(s)	植田, 晃次
Citation	言語文化研究. 2017, 43, p. 9-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本近代朝鮮語教育史の視点から見た山本^{まさのぶ}正誠と朝鮮語

—人物史と著書を通して—

植田 晃次

일본 근대 한국어 교육사 시점에서 본 야마모토 마사노부 (山本正誠) 와 한국어

—인물사와 저서를 통하여—

우에다 고오지

논문초록: 야마모토 마사노부 (山本正誠) 는 1923년에 출판된 “조선어연구 (朝鮮語研究)” 를 비롯한 한국어 학습서 4권의 저자로 일본 근대 한국어 교육사에서 알려진 인물이다. 이바라키현 (茨城縣) 에서 태어난 그는 도쿄외국어학교 조선어과를 졸업하자 조선총독부에 봉직하게 되었다. 총독부 관리로 지내면서 전문학교나 강습회에서 일본인을 상대로 한국어를 가르치기 시작하였다. 그후 경성고등상업학교 등에서 한국어 교사로 교편을 잡다가 고등문관시험에 합격한 후에는, 회령공립상업학교 교장으로부터 시작하여 실업학교 교장직의 길을 걷게 되었다. 또 제 2 차세계대전 후에는 자신의 고향인 미토 (水戸) 에서 교육위원회 초대 교육장 등을 역임하게 되었다. 본 논문은 이러한 인물사와 저서를 통하여 야마모토와 한국어의 관계를 일본 근대 한국어 교육사의 시점에서 고찰한 연구이다.

키워드: 山本正誠, 『朝鮮語研究』, 朝鮮語教育史

1.はじめに

山本正誠は1923(大正12)年に出版された『朝鮮語研究』をはじめとする4種の朝鮮語学習書の著者として日本近代朝鮮語教育史で名を知られた人物である。茨城県で生まれた山本は東京外国語学校朝鮮語科を卒業すると朝鮮総督府に奉職し、総督府官吏として勤める傍ら、専門学校や講習会で日本人に朝鮮語を教え始める。その後、京城高等商業学校等で朝鮮語教師として教鞭を執るも、高等文官試験合格を契機に会寧公立商業学校を振り出しに実業学校校長の道を歩む。さらに、第2次世界大戦後には郷里の水戸で教育委員会初代教育長等を歴任する。本論文はこのような人物史と著書を通し、山本と朝鮮語との関わりについて日本近代朝鮮語教育

史の視点から、「人物史主義」と「原物主義」¹⁾に基づき考察する。

山本の経歴や著書に触れた先行研究として、櫻井（1979: 533・534・536）・李康民（2015: 244-245）等があるがいずれも簡略なものである。また、成玗（2013）では、著書の一部に触れている²⁾。

2. 山本正誠の人物史

まず、正誠という名の読みについて述べる。この表記の名の実例としては、「まさなり」・「まさのぶ」・「まさもと」等がある³⁾。実際、国立国会図書館のOPACやCiNii Booksでは「マサナリ」という読みを採っている⁴⁾。また、山本による寄贈本である『最新朝鮮語会話辞典』（南山図書館蔵）の標題紙には、寄贈時のものか後の「旧日書」の整理時のものかは確定できないが、おそらく図書館での後者の整理時のものと見られる「(저자) ヤマトマサアキ」という書き込みがある⁵⁾。他にも秋田県立図書館のOPACのように「ショウセイ」としているものもある⁶⁾。管見の限りでは、山本の著書等で読みが明示されたものは見出し得ていないが、一部で「まさのぶ」とされている紳士録の類がある⁷⁾。これらの紳士録の類が山本の存命中に発行された公刊物である点、また、東京外語同窓会発行の『会員名簿』の昭和13年用（1937/昭和12年12月）・昭和14年用（1938/昭和13年12月）・昭和15年用（1940/昭和15年3月）で正誠の「誠」に「ノブ」とルビがふられている点を根拠に、本論文では、「まさのぶ」を採る。

次に、姓について、『朝鮮語研究』初版（1923/大正12年2月5日発行）では、3章で示すように標題紙・本文冒頭・検印では山本、表紙・背表紙・奥付では小林となっているものがある（表3参照。例えば、東京都立多摩図書館蔵1110961086）。標題紙・本文冒頭・検印では山本、奥付では小林正誠と印刷された上に山本正誠と印刷された紙片を張り付けて著者名を修正してあるものがあるが、これらでは表紙・背表紙も山本となっている（表3参照。例えば、秋田県立図書館蔵112143144）。ここに見られる小林姓の表示・修正理由は不明である。これは、2種の初版本の状況から見て、改姓によるものではなく、印刷・出版上の何らかのミスによるものではないかと思われる。

1) 植田（2012: 204）。なお、本論文は「原物主義」を採るが、引用文での旧漢字は、論旨に影響しない限り新漢字で表記する。

2) 成（2013: 277-278）のリストは、山田（2004）のリストを基に「実見した」資料では相違を修正したとされているが、重版のものについて、その発行年を記したもの（資料番号T12）、初版発行年を記したもの（同T15-2の長野県立）が混在するなど不正確である。

3) 日外アソシエーツ（2004: 360）

4) 2016年9月20日最終接続

5) 表紙2に大正14年11月付の寄贈印がある。저자는著者の意である。

6) 2016年9月20日最終接続

7) 野田・竹内（1958: 522）、野田（1964: 640）

人物史の一次資料としては、1921(大正10)年4月16日までの履歴書、『朝鮮総督府官報』⁸⁾、山本の著書等がある。以下は主にこれらによりつつ、他の二次資料により補い、山本の人物史を整理する。

山本正誠は1891(明治24)年1月25日、森山崇徳の五男として茨城県に生まれ、のちに、山本三三の養子となる⁹⁾。1909(明治42)年3月26日、茨城県立太田中学校を卒業する¹⁰⁾。翌年の同校の同窓会会報には森山正誠とあり¹¹⁾、少なくともこの頃までは森山姓であった可能性がある。原籍・本籍については、現・常陸太田市と水戸市の2地名が見られる。すなわち、原籍として、県立太田中学校の同窓会名簿(1933/昭和8年)では「久慈・幸久・上河合」¹²⁾とあるが、「履歴書」では「茨城県水戸市奈良屋町二十三番地」¹³⁾とされている。さらに、1910(明治43)年の段階で実父の森山崇徳が幸久村に在住していた¹⁴⁾。これらを併せ見れば、幸久村で森山の下に生まれ、中学卒業の頃、水戸市の山本家の養子となったと推察できる。

1910(明治43)年の時点では、士官学校を志望していたようだが¹⁵⁾、1913(大正2)年、明治大学本科英文科3年を修了し¹⁶⁾、1914(大正3)年3月28日、東京外国語学校本科朝鮮語科を卒業する¹⁷⁾。

東京外国語学校を卒業するや、1914(大正3)年4月9日には朝鮮総督府雇員・内務局第一課勤務¹⁸⁾、1915(大正4)年6月30日には朝鮮総督府属に任ぜられる¹⁹⁾。

1918(大正7)年9月19日には、私立東洋協会京城専門学校朝鮮語講師嘱託を許可される²⁰⁾。

8) 履歴書として「山本正誠ヲ朝鮮総督府京城高等商業学校助教授」国立公文書館アジア歴史資料センター(レファレンスコード:A04018224600, 2016年9月19日最終接続)がある(以下、「履歴書」と略)。「朝鮮総督府官報」は、断りのない限り「朝鮮総督府官報活用システム」(韓国・国立中央図書館, <http://gb.nl.go.kr/Default.aspx> 2016年9月13日最終接続)を用いた(以下、同システムによるものを「官報」と略)。

9) 猪野(1925; 1937²⁾: 37)。ここでは「水戸市に生れ」とある。実父の森山は、弓道・大和流に関わる人物のようである。1901(明治34)年3月25日に柏正功から指南免許を受け、1906(明治39)年には大内義一に免許を授けている。茨城弓道連盟ウェブサイト(<http://ibakyuren.com/aumimeijiH22.html>, 2016年9月13日最終接続), Kyudo Online Library Projectウェブサイト(<http://kyudo.s28.xrea.com/KOLP/timeline/timeline02.htm>, 2016年9月13日最終接続)

10) 宮田(1910: 31, 83)・茨城県立太田中学校同窓会(1933: 40)・茨城県立太田第一高等学校同窓会(1950: 15)・株式会社日本名簿出版(1991: 32)。野田・竹内(1958: 522)、野田(1964: 640)にも旧太田中の卒とある。太田中学校から東京外国語学校韓語科に進んだ先輩として小貫健・萩谷二郎がいる(小貫1910: 114)。しかし、植田他(2006: 27)では、萩谷の名は1912(明治45)年3月卒業として確認できるが、小貫の名は見られない。

11) 宮田(1910: 83)

12) 茨城県立太田中学校同窓会(1933: 40)。茨城県立太田第一高等学校同窓会(1950: 22)でも本籍を久慈-幸久、野田・竹内(1958: 522)や野田(1964: 640)でも常陸太田市上河合町としている。

13) 大内(1948: 281)では番地が「一七六」。

14) 宮田(1910: 附録10)

15) 宮田(1910: 83)

16) 大内(1948: 281)。ただし、東京外国語学校の在学と重複していること、大内(1948)以外にこれを示す資料が見当たらないことから、この点については更なる確認を要する。

17) 「履歴書」。大内(1948: 281)では1913(大正2)年とされているが、『会員名簿 昭和六年十二月』(東京外国語学校同窓会)等の資料と照合しても誤りと思われる。

18) 「履歴書」

19) 「履歴書」, 「官報」1915(大正4)年7月9日付

20) 「履歴書」

1919(大正8)年7月1日には、第2回判任官見習講習会で李完応とともに朝鮮語を担当するなど²¹⁾、この頃から総督府官吏としての業務の傍ら、日本人に朝鮮語を教え始めたとみられる。1920(大正9)年4月15日には、総督府を退職すると同時に私立東洋協会京城専門学校(翌5月1日に商業学校に改称)教授に就任している²²⁾。総督府の退職はこの転職のためであろう。この後、京城医学専門学校朝鮮語講師(1921/大正10年2月8日)、京城工業専門学校朝鮮語講師(1921/大正10年4月16日)を嘱託される²³⁾。さらに、1923(大正12)年5月11日には、朝鮮総督府京城医学専門学校教授の兼任となる²⁴⁾。また、少なくとも1939(昭和14)年度には京城高等工業学校でも朝鮮語を教えている²⁵⁾。

これらの朝鮮語を教える業務に前後して、3章で示す4種の朝鮮語学習書を1915(大正4)年から次々と刊行し、少なくとも1936(昭和11)年まで版を重ねている。

私立東洋協会京城専門学校嘱託となった27歳の頃(1918/大正7年)から朝鮮で日本人に朝鮮語を教えることを職業とした山本に40歳で転機が訪れる。1931(昭和6)年、遅まきながら、高等文官試験行政科に合格するのである²⁶⁾。これを機に、教育行政の管理職、すなわち高級官僚の道を歩み始める。1932(昭和7)年3月29日、朝鮮公立実業学校長に任ぜられ、会寧公立商業学校長に補される²⁷⁾。紳士録の類では「栄転」とされるものの²⁸⁾、会寧は朝鮮の北辺に位置し、気候その他の生活条件が厳しいところである。山本の後継校長となる渡植彦太郎は、「朝鮮の北境にある会寧と云う田舎町にある全鮮[ママ]一の貧弱な商業学校長に突如として左遷されて仕舞った。」²⁹⁾と就任当時を回顧していることからその職務・生活環境が推察される。会寧で「岡境[ママ]商業教育の刷新に新進気鋭の覇気を傾注すること三ヶ年再び抜擢」³⁰⁾され、1935(昭和10)年3月30日、元山公立商業学校長に補される³¹⁾。元山でも山本は、「我元山商業学校もその例に洩れず新校長赴任後の向上発展の状態は時々新聞紙上を賑はすまでに目覚しく校舎の新築内容の充実着々として行はれ古き歴史を有する学校として錦上更に華を添へた感が生じた。山本氏は頭脳明徹永き専門学校教育の閱歴を有する丈にその識見高邁なる点に於いて群を抜き商業教育の目的抱負に於いて間然する処なき理論的計画があり斯界の第一人者として推奨され

21) 植田 他(2007:49)

22) 「履歴書」。植田 他(2007:15)では1922年4月~1932年3月、稲葉(2005:336)では1922~31年度と就任時期に齟齬がある。なお、官立化に際し、助教授となっている(稲葉2005:336)。

23) 「履歴書」。京城医専就任時期については、植田 他(2007:14)では1923年5月~1932年3月と齟齬がある。

24) 「官報」1923(大正12)年5月16日付

25) 植田 他(2007:14-15)

26) 猪野(1925;1937¹²⁾:37)、野田・竹内(1958:522)

27) 「官報」1932(昭和7)年4月4日付

28) 阿部(1935:836)、朝鮮研究社(1937:92)

29) 渡植(1959:138)

30) 朝鮮研究社(1937:92)

31) 「官報」1935(昭和10)年4月5日付

る。』³²⁾と評されたように辣腕を振るったようである。当時の山本の人となりや教育方針の一端については、「氏は水戸魂を受けて皇道と正義に熱烈な景仰を抱く人、其の意気には情夫をも起したしむる気概がある[ママ]生徒を感憤興起せしむる所は蓋[ママ]大なるものがあらう。殊に商業教育をして先づ人格陶冶の上に築かんとし全き人としての訓練に重きを置く所に其の人物を見るべきであらう。(中略)その理想とする商人の指導陶冶に全力を注ぎ、人格と算盤とを一致させる堅実な商人の養成に一生を注ぐるであらう。』³³⁾とも述べられている。もちろんこのような紳士録の類の記述を額面通りに受け取るのは必ずしも妥当とは言えなからうが、校長としての活躍ぶりは想像される。

4年後の1939(昭和14)年4月1日、次には仁川公立商業学校長に補される³⁴⁾。さらには、1945(昭和20)年4月1日付で仁川公立女子商業学校長を兼任することになる³⁵⁾。山本は、会寧・元山・仁川(含兼任校)のいずれの学校でも、教諭を兼任しているが³⁶⁾、何を教えたのかは不明である。

山本がいつ朝鮮を後にしたのかについては確かな記録はないが、「終戦後引揚」とするものがある³⁷⁾。後述の水戸でのいち早い活動の開始時期と敗戦当時の山本の年齢(55歳)を踏まえれば、定年もしくは引退して敗戦直前に引揚げた³⁸⁾可能性も否定できない。

上で述べたように、早くも敗戦3ヶ月後にして、山本は敗戦間際の空襲で大きな被害を受けた郷里の水戸でそれまでの経験を買われ教育行政の管理職として活動を始める。これについては、山本自身が「教育行政官や商業高等学校校長等を歴任したことのある私が戦災直後の昭和二〇年十一月以来、市の学務課長、教育部長の職にあつたので、初代教育長として任命され」³⁹⁾たと述べている。「機構改正により教育部長兼学務課長、社会教育課長」・「学務部長」等を歴任したとあり⁴⁰⁾、具体的には、「水戸市役所学務課長(昭20)同教育部長」⁴¹⁾、1946(昭和21)年には水戸市主事⁴²⁾、1948(昭和23)年には「教育庁[ママ]講習」を修め⁴³⁾、1952(昭和27)年11月1日

32) 朝鮮研究社(1937:92)

33) 阿部(1935:836)。以下、引用文中の「、」は「,」に書き換えない。

34) 「官報」1939(昭和14)年4月8日付。稲葉(2005:336)では在職について、1939~43年度で、以後不明とされている。

35) 「官報」1945(昭和20)年5月1日付。大内(1948:281)では、1945(昭和20)年5月から朝鮮公立中学校長とされている。

36) 「官報」1932(昭和7)年4月9日付、1935(昭和10)年4月5日付、1939(昭和14)年4月8日付、1945(昭和20)年5月1日付

37) 大内(1948:281)。総督府退職については、「官報」の他、天理図書館蔵(日本マイクロ写真株式会社、大阪大学総合図書館蔵)のマイクロフィルムでも確認したが、少なくとも1945(昭和20)年5~8月分に所収の叙任及辞令には確認できなかった。

38) 矢野謙一教授(熊本学園大学)のご指示による。

39) 山本(1953:52)

40) 大内(1948:281)、茨城県立太田第一高等学校同窓会(1950:22)

41) 野田(1964:640)。野田・竹内(1958:522)では社教課長も務めたとされる。

42) 大内(1948:281)

43) 野田・竹内(1958:522)。この講習は「昭和二十三年教育委員会の設置に伴い、教育長・指導主事の養成及び教員養成諸学校の教職課程担当教員の現職教育を目的として開催された全国的な講習である」教育指導者講習(IFEL)と見ら

に新たに発足した水戸市教育委員会の初代教育長となり、1956(昭和31)年9月30日まで務めている⁴⁴⁾。

教育長を退任した後は、1957(昭和32)年2月11日開館の常盤神社義烈館に勤め、主事兼館長(1958/昭和33年)、主事(1959/昭和34年)、館長補佐(1964/昭和39年)等の肩書が見られる⁴⁵⁾。このように、73歳を迎えた1964(昭和39)年まで足取りがたどれるが、没年・墓所を含め、その後については残念ながら明らかにし得なかった。晩年には、県郷土文化研究会理事・新日本協議会県支部常任理事・裁判所調停委員を兼職し⁴⁶⁾、教育界の名士のような立場にあったようである。紳士録の類による限り、その後1969(昭和44)年までの間に亡くなったのではないかと推測される⁴⁷⁾。

家族は妻と三女があり、名前等は野田・竹内(1958:522)、野田(1964:640)に掲載されているが、ここでは明示は控える。これらによれば、山本の趣味は謡曲・音楽・詩吟、特技は柔道(3段)とされている。柔道については、在学時に東京外国語学校の朝鮮語科教授でもあった講道館の本田存⁴⁸⁾との関連によるものかもしれない。また、宗教は神道とあり、義烈館での勤務との関連が推測される。

3. 山本正誠の著書等

本章では山本の著書等の著作物を示す。朝鮮語学習書については、概略や特記事項、現在までに確認できた異本の発行状況を含めて示す。

3.1 朝鮮語学習書

管見の限りでは、山本には以下の4種の朝鮮語学習書類がある。これらは2章で述べた講習会や学校での教材を基に編纂された、また、そこでの使用に基づいて修正・改訂が行われた可能性があるだろう。

3.1.1 『増訂(独修)朝鮮語会話 全 単語及辞典』

本書は増訂7版のみ信州大と岐阜大に所蔵されており実見できた。増訂7版の著者は西村真

れる(文部科学省ウェブサイト「学制百二十年史」 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318262.htm, 2016年9月21日最終接続)。

44) 山本(1953:52)、水戸市ウェブサイト「歴代の教育委員会委員」(<http://www.city.mito.lg.jp/000271/000273/000294/01001/p001336.html>, 2016年9月13日最終接続)

45) ()内は典拠の発行年。野田・竹内(1958:522)、山本(1959:35)、野田(1964:640)。

46) 野田(1964:640)

47) 野田(1964)には掲載されているが、仙波(1969)では見られない。なお、株式会社日本名簿出版(1991:32)では物故者となっている。

48) 植田(2015)

太郎・山本正誠，印刷所はウツボヤ印刷部，発行はウツボヤ書籍店である。その奥付によれば7版を重ねている。各版次と発行日は表1の通りである。なお，初版から6版の発行日は，増訂7版（信州大・岐阜大所蔵）の奥付によった。

表1 『増訂（独修）朝鮮語会話 全 単語及辞典』の版次・発行日

初版	1915 (大正 4). 8. 25	再版	1915 (大正 4). 11. 1	3 版	1916 (大正 5). 5. 28
4 版	1917 (大正 6). 4. 25	5 版	1918 (大正 7). 5. 10	6 版	1919 (大正 8). 12. 3
増訂 7 版	1920 (大正 9). 8. 26				

書名は，表紙では『増訂独修朝鮮語会話 全』とあるが，背表紙・標題紙・本文冒頭・奥付では「独修」は付いていない。本書は東京外国語学校の先輩でもある西村真太郎との共著となっている。しかし，『朝鮮語会話 全』（西村真太郎（1915; 1917⁴⁾，京城日報代理部）と組版を含め同一の内容である。また，1906～1912年まで東京外国語学校で外国教師・講師として勤めた延浚⁴⁹⁾による序には「西村君公退之暇留心于此嘗摭取實際恒用之語編成一冊訳之以国語又傍添発音以便内地人之独習名之曰朝鮮語会話来示余而仍求弁卷之文」とある。ここから，共編したものを西村の名で発行した，もしくは西村の著書に後年山本が関与したと見て差支えない。元の本・「増訂（独修）」ともに「増補篇」に「茲に第四版を印行するに際し日常必須の副詞百及其後の試験問題解答等を増補する事とした。」とあることから，奥付では示されていないものの，第4版で増補が行われ，その際に山本が関与したのではないかと考えられる。山本が主たる著者ではなかったことは，4冊目の著書となる筈の『最新朝鮮語会話辞典』の「(前略) 是等篤学の士の為に浅学をも観みず三度朝鮮語に関する書を公にする次第であります」(初版「序」6-7頁)という文言からも推察される。なお，奥付を見るに，「増補（独修）」の版次は西村のものを継いでいる⁵⁰⁾。「増補（独修）」では校閲に高木国則（朝鮮総督府警官練習所教授兼京畿道警視）の名が挙げられている。

本書には『朝鮮語会話 全』にない「諺文（언문）ニ就テ（訓民正音）」が「例言」と「目次」の間にある。これは3.2で示す山本の「諺文（언문）に就て（訓民正音）」と同一のものである（片仮名と平仮名の違いはあり）。また，『新新朝鮮語会話』冒頭の「諺文（언문）に就て」も文末部分を除き同一の文が使い回しされている。

「例言」には，「一，本書ハ一般ニ朝鮮語ヲ学修セントスル者殊ニ諸官庁銀行会社等ニ於テ朝鮮語ノ試験ニ応セムトスル者ノ為メニ総テ受験ニ必要ナル会話訳文等ヲ蒐集シテ編纂セリ（中略）／一，著者ハ他日国鮮文典及会話精通ノ上梓ヲ俟チテ再ヒ読者ニ見ユル日アラシム」とある⁵¹⁾。

49) 東京外国語大学史編纂委員会（1999: 976）

50) ただし，奥付を比較するに西村の『朝鮮語会話 全』は大正6年4月25日印刷・大正6年4月30日第4版発行であるが，本書では大正6年4月25日第4版発行とあり，後者では前者の印刷日が発行日になっている。

51) ここにいう「会話精通」は西村の『日韓会話精通』（京城日報社代理部，1917/大正6年）を指すと見られる。

また、327頁からの「判任官見習試験問題集」には第1回（大正元年12月施行）・第1回の2（試行年月日不記載）・第2回（施行年月日不記載）・第3回（大正2年8月4日施行）・第5回（大正3年4月施行）・第5回の2（施行年月日不記載）・第6回（大正3年10月施行）・第7回（大正4年4月18日施行）が採録されている（第4回は不掲載）。さらに増補篇の「試験問題解」には、第8回（大正4年10月施行）・第9回（大正5年3月施行）・第10回（大正5年10月施行）が採録されている。これは本書の教科書、あるいは受験参考書としての性格、すなわち商業出版物としての性格⁵²⁾を示している。

3.1.2 『新新朝鮮語会話』

確認できたものはいずれの版次も著者は山本正誠、発兌は大坂屋号書店（東京）である。初版には印刷が東京の版と京城の版の2種類ある。各版次と発行日等を表2に示す。

表2 『新新朝鮮語会話』の版次・発行日・印刷所・所蔵

(印刷地) 版次	発行日	印刷所	所蔵 ⁵³⁾
(東京) 初版	1921 (大正10). 5. 25	戸田耕司 (印刷)	阪大, 東経大桜井文庫 D, 国立台湾図書館
(東京) 訂正3版	1923 (大正12). 1. 10	宮田亀六 (印刷者)	大阪市大, 九大*
(京城) 初版	1924 (大正13). 4. 15	京城印刷所	東経大桜井文庫 D
(東京) 再版	1928 (昭和3). 11. 5	山崎一男 (印刷者)	長野
(東京) 7版	1930 (昭和5). 10. 11	山崎一男 (印刷者)	個人蔵
(東京) 8版	1933 (昭和8). 12. 10	山崎一男 (印刷者)	北九州 (八幡), 金沢 (玉川)

本書の書誌でまず注意すべき点は、初版に2種類のものが存在する点である。すなわち、1924 (大正13) 年4月15日発行の版は一見、純粋な初版、もしくは1921 (大正10) 年5月25日発行初版の重版に見えるが、1923 (大正12) 年9月1日の関東大震災によって、東京の印刷者・宮田亀六の活字あるいは紙型が失われ、京城印刷所で活字を組み直した新たな初版と見られるので注意を要する。表2で示した訂正3版奥付の初版発行日は東京で印刷された初版の、再版・7版・8版の初版発行日は京城で印刷された初版の日付である。

なお、書名の「新新」は「新々」と表記されている箇所がある⁵⁴⁾。

田中徳太郎関・柳苺根関とあるが、田中は山本の外国語学校・総督府での先輩の朝鮮総督府通訳官、柳は外国語学校在学中の講師である。

「本書ハ先輩西村真太郎氏トノ共著タル増訂日鮮語会話ノ姉妹書ニ係リ朝鮮語ヲ学修セントス

52) 植田 (2014) は朝鮮語学習書の商業出版物としての性格について論じている。

53) 「所蔵等」欄の*はILLによる複写、Dはデジタル化資料での確認を示す。これらの利用については注55で述べる。公立図書館は当該自治体名で、研究機関は略称で示す。都道府県・政令指定都市は「府」等を略す。

54) 例えば、長野県立図書館本では表紙・標題紙では「新新」、背表紙・本文冒頭・奥付では「新々」となっている。

ル初学者ノ独習用トシテ編纂セルモノナリ理論的ノ語句ハ之レヲ避ケ可成実用的ノ語彙ヲ蒐集スルニ努メタリ」(8版「凡例」)とあり、3.1.1の『増訂(独修)朝鮮語会話 全』の「姉妹書」として位置づけられた独習書とされている。「朝鮮語に関する智識皆無なる人にてても本書に拠て練習すれば会話自在なるを得べき宝典なり。」という宣伝文句(『東京朝日新聞』1923/大正12年3月29日3面)からもお手軽な学習書、さらに商業出版物としてのコンセプトが見える。なお、巻末に試験問題は採録されていないが、附録として恩師・金澤庄三郎の「朝鮮語の調査中動詞形容詞に関する事項」等が採録されている。

3.1.3 『朝鮮語研究』

本書も初版には2種類あり、著者名だけが異なる。実見できたものの発元はいずれの版次も共通で大阪屋書店(東京)である。版次と発行日等を表3に示す。

表3 『朝鮮語研究』の版次・発行日・著者・印刷者・所蔵

版次	発行日	著者	印刷者	所蔵
初版 双名本	1923(大正12).2.5	山本正誠/ 小林正誠	佐藤磨	京都, 大阪(中央), 東京(多摩), 長野, 島根, 鹿児島, 横浜, 名古屋(鶴舞), 国立台湾図書館, 阪大
初版 単名本	1923(大正12).2.5	山本正誠	佐藤磨	秋田(奥付は著者名貼付で修正)
再版	1923(大正12).10.1	未確認	未確認	下記所蔵の3・4・5版奥付による
3版	1924(大正13).2.10	山本正誠	天野キヨ	埼玉(久喜), 静岡, 三康, ソウル大
4版	1928(昭和3).12.20	山本正誠	山崎一男	富山, 金沢(玉川)
5版	1936(昭和11).5.20	山本正誠	小林美三	阪大

本書の書誌でまず注意すべき点も、初版に2種類のものが存在する点である。すなわち、2章で述べたように、著者の姓が標題紙・本文冒頭・検印では山本、表紙・背表紙・奥付では小林となっているものと、標題紙・本文冒頭・検印では山本、奥付では小林正誠と印刷された上に山本正誠と印刷された紙片を張り付けて著者名を修正し、表紙・背表紙も山本となっているものである。前者を「初版双名本」、後者を「初版単名本」と名付けておく。

管見の限りでは、5版まで版を重ねているが、再版は見出し得ていない⁵⁵⁾。

「関東地方震災ニ際シ本書ノ原活字不幸ニシテ灰燼ニ帰シタルニ依リ之レガ再版ヲ為スニ当リ第一版ニ於テ不備ノ点多々アリシヲ全部校正補充セリ(3版「はしがき」)」という記述から、

55) 本論文は影印本・デジタル化資料を「最終的な判断に用いることは極力避け、可能な限り原物を実見」する原物主義(植田2012:204)に立つものであるが、これに抵触しない補助的方法として、CiNiiで国内に蔵書が示されたものうち、2016年9月9日現在で複写取寄せ可能なものをすべてをILLによる複写取寄せにより確認した。CiNiiもしくはローカルOPACに示された版次は原物と異なっている場合が散見されるためである。調査結果は以下の通りである。初版双名本(滋科大・佐賀大117247000・東大韓国朝鮮・九大)、初版単名本(大阪市大)、3版(大阪府立大・佐賀大117187133・富山大・駒沢大・愛教大・拓殖大)、4版(小樽商大・立教大・東大4840296471・大谷大・日本大学総合学術情報センター)、5版(学習院大・京大・筑波大・鹿児島県立短大)。

関東大震災によって初版の活字が失われた1ヶ月後の1923(大正12)年10月1日に早くも新たに組版した再版が発行されていることになる。しかし、少なくとも3版でのこの記述は1923(大正12)年12月末日付であり、再版「はしがき」で日付が異なっていないなら矛盾する日付である。なお、初版の印刷者は佐藤磨(東京)であるが、3版の印刷者は天野キヨ(京城)であることから、未見の再版も京城で印刷された可能性が高い。

「はしがき」の引き写しから始まる「本書は初学者が文法を基礎として秩序的に朝鮮語を習得し得る事を主眼とし編纂せられたるものなれば応用練習例題の外は総て振りかな付きとし諺文の組立より漸次会話に移り諺文の読方並に綴方習得上の便宜の為特に応用例文並に時文をも載せ巻末には動詞、形容詞の活用方法をも詳述し官庁用語、朝鮮語奨励試験問題をも付記したれば朝鮮語研究者の唯一無二の参考書なり。」という宣伝文句(『東京朝日新聞』1923/大正12年3月29日付3面)は学習者にあたかも非常に有用な学習書であるかのように受け取られ得る。しかしながら、菅野裕臣(東京外国語大学名誉教授)は回顧録で、「わたくしは高校生になってから神保町の本屋で買った朝鮮語入門書(戦前に日本人の著したもの。山本正誠、『朝鮮語研究』、大阪屋号書店、1922年、305ページ)ですこしずつ勉強していたが、疑問だらけだった。」と述べている⁵⁶⁾。卒業後、朝鮮での生活が9年になるとはいえ、ある言語が使えるということ、それを論理的に記述できるということは別物であるにも拘らず、クロス装・金文字(さらに4・5版では函入り)など商品としての価値を高める商業出版物としての仕掛け⁵⁷⁾は、宣伝文句にあるような内容をも学習者に期待させるのである。5版(1936/昭和11年)に至っても1921(大正10)～1923(大正12)年の試験問題が3版と変わらず収録されている点も内容より見かけを重視する商業出版物としての性格を表している。

本書は構成から見ても、教科書として諸学校で用いられていたと推測される。

3.1.4 『最新朝鮮語会話辞典』

確認できたものはどの版次も著者は山本正誠、発行所は朝鮮印刷株式会社出版部、印刷所は朝鮮印刷株式会社で共通している。版次と発行日等を表4に示す。

表4 『最新朝鮮語会話辞典』の版次・発行日・所蔵

版次	発行日	所蔵
初版	1925(大正14).6.25	三康, 南山
再版	1925(大正14).7.10	下記所蔵の4版奥付による
3版	1925(大正14).7.20	東経大桜井文庫D
4版	1925(大正14).7.30	韓国国会D

56) 百孫朝鮮語学談義ウェブサイト「菅野裕臣のAutobiografia」<http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/cgi-bin/hr.cgi?autobio/autobio-1.html> (2016年9月14日最終接続)。なお、1922年というのは誤りと思われる。また、初版は233頁であり、305頁のものは(再版の頁数は不明ながら)少なくとも再版もしくは3版以降のものである。

57) このことは植田(2014)参照。左で扱った金鳥は些か胡散臭い催眠術家でもあった(金鳥1904;1904⁴⁾)。また、植田(2009)が扱った『朝鮮文朝鮮語講義録合本』が実際以上に立派に見えるのもこの仕掛けの効果による。

表4を見るに、初版からひと月の間に4版を重ねており、1925(大正14)年6月25日発行のものが実際に初版にあたるのか疑われる。しかしながら、2章で述べたように南山図書館蔵書が著者寄贈本であることから見て初版であると判断して支障ないと思われる。奥付の表示では版を重ねていることになるが、実質上は重刷であろう。このような短期間の重刷は散見され、その要因については商業出版物という側面からの検討が必要となろう。

第1章で「諺文」、第2章で「語法の概念」の概略を見た後、第3章で「諺文語漢字語を暗記し語彙を豊富に」するという方法での朝鮮語習得を企図したものである(初版「凡例」)。ここでいう諺文語(及)漢字語は「朝鮮総督府編纂に係はる朝鮮語辞典より日常使用する語彙を引用索引の便宜を図り「イロハ」文字順に配列し之れが発音並に活用例文を示」したもの(初版「序」)である。第4・5章では動詞・形容詞の活用、第6章では附録として綴字法の準則を採録している。

「序」(初版)では、他の著書にはない執拗さで朝鮮語学習の意義・朝鮮語有用論が述べられている。これらについては、4章で示し、検討する。

3.2 その他

管見の限り確認できた山本による朝鮮語学習書以外の著作物は次の通りである。

「朝鮮の俚諺に就て」『朝鮮彙報』大正6年10月号、朝鮮総督府、1917(大正6).10.1

「諺文(언문)に就て」『朝鮮彙報』大正9年5月号、朝鮮総督府、1920(大正9).5.1(以上2件、国立国会図書館デジタル化資料)

「学習上より見たる朝鮮語」『朝鮮文朝鮮語講義録(第一回)』1号、朝鮮語研究会、1924(大正13).10(ソウル大中央図書館 Y36/2/1(1))⁵⁸⁾

「学習上より見たる朝鮮語」『朝鮮文朝鮮語講義録(第三回)』2号、朝鮮語研究会、1927(昭和2).11.1(宮城県立図書館 P829.1/チ)

「葉書回答」『朝鮮公論』昭和十八年四月号、朝鮮公論社、1943(昭和18).4.10(オークラ情報サービス影印)

「水戸市教育委員会のあゆみ」『教育委員会月報』5(5)(No.36)、文部省、1953(昭和28).8

「地教委発足一年九か月を顧みて」『教育委員会月報』6(7)(No.50)、文部省、1954(昭和29).10(以上2件、国立国会図書館デジタル化資料)

「偕楽園」『水戸学研究』昭和34年第1号(通巻66号)水戸学研究会出版部、1959(昭和34).4.

58) 「学習上より見たる朝鮮語」は『朝鮮文朝鮮語講義録合本』の諸異本にも採録される。諸異本については植田(2009)で論じている。

総督府属の時代に総督府機関誌に朝鮮語についてを2編、京城高等商業学校助教授時代に朝鮮語学習雑誌に1編、商業学校長時代に名士へのアンケートへの回答1件の他、引き揚げ後、教育行政に従事した回顧録2編、その他1編である。朝鮮語について見ると、基本的には学習書以外は著していないと見做して差し支えない。

4. 山本正誠と朝鮮語

1891(明治24)年、茨城県幸久村で五男として生まれた森山正誠は中学卒業頃まで親元で育つも、水戸の山本家の養子となり、さらなる勉学のため上京する。当時の状況を考えれば、国もとて家督を継ぐわけにはいかず、進路として自然な成り行きであろう。

上京後、士官学校を志望するも外国語学校朝鮮語学科に入学する。「少壮にして渡鮮[ママ]飛躍の大志を既に抱けるものであつた。」「青年時代から志を朝鮮に寄せ」⁵⁹⁾という後年の紳士録の類での評価はともかく、当時の社会情勢・環境から朝鮮という異文化は山本のような人物にとって人生を切り拓いていく活動の場としての単なる選択肢のひとつであったと考えられる。あるいは東京外国語学校に進んだ中学校の先輩の影響があったかもしれない。朝鮮語科の先輩である奥山仙三が総督府に就職したように⁶⁰⁾、総督府への就職もまた当時の同学科卒業生の進路としては、自然なものであった。すなわち、山本は東京外国語学校入学によって異文化である朝鮮語と結びつき、以後30年余り、朝鮮が山本の生活の場となる。

朝鮮語科出身という学歴を持ち総督府に就職した山本は官吏として働く傍ら、習得した朝鮮語によって学校や講習会でそれを日本人に教えるという業務を行うことになる。さらには総督府を退職し、京城高等商業学校他でそれを本業とすることになる。ある言語を教えようとする際、一般に教科書が必要となる。外国語学校で学んだ朝鮮語を基に現地経験を積む中で習得した朝鮮語を元手に、外国語学校と総督府の先輩の西村真太郎の著書『朝鮮語会話 全』の増訂への関与を皮切りに、教科書・受験参考書としての性格、すなわち商業出版物としての性格を持つ朝鮮語学習書を4種著すことになる。自ら、また他の教師によって学校や講習会で使われることにより、それらは版を重ね、もはや朝鮮語は山本にとって生活の糧を与えてくれる財産となったのである。中には実業学校長となった後にすら版を重ねるものもあった。

しかしながら、医学専門学校や工業専門学校で日本人に朝鮮語を教えるという職業を山本は如何様に捉えていたのであろうか。実際、京城医学専門学校に関する研究において挙げられた教員のリストに山本は見られないことや同校の記念誌にもその存在の形跡が見られないことから⁶¹⁾、学内での朝鮮語教授・山本正誠の位置づけが推し量られる。他方、京城高等商業学校にお

59) 朝鮮研究社(1937:92)・阿部(1935:836)

60) 植田(2016)

61) 石田(2012:8-14)・泉(2009:57-60,281)・高尾(1990)

いては、朝鮮語が必修科目とされ、朝鮮人と日本人の教師が在職し、約半数の学生は他校生よりは朝鮮語ができたという⁶²⁾。しかしながら、山本の辞職後の1935年頃から朝鮮語は選択科目となり、1938年4月以降は事実上廃止される⁶³⁾といった流れの中にある当時の社会状況からどれほどのモチベーションが学生にあったかはわからない。また、京城医学専門学校⁶⁴⁾の51名の日本人教員を対象とした調査によれば、帝大卒(41%)・医専卒(43%)が大半を占め⁶⁴⁾、さらに「私立京城高等商業学校では教授であったが、東京外国語学校朝鮮語学科卒の学歴ゆえか、官立京城高等商業学校では助教授であった」⁶⁵⁾山本は決して学内のメインストリームに位置していたとは言えないだろう。

山本は例えば、『最新朝鮮語会話辞典』(初版)の序で以下のような朝鮮語学習の意義を述べ、朝鮮語有用論を展開している⁶⁶⁾。

「真に内鮮の融和を図る為めには内地人は言語を通じて朝鮮人の心性風俗慣習を熟知せねばなりません」

「仮に全民衆が解し得る程度に至りましても彼らが存在して居る以上朝鮮語の不必要になることは想像し難き結論であります。」

「既に渡鮮[ママ]して居られるる[ママ]内地人は勿論将来渡鮮[ママ]せんとするの士は日韓併合の詔勅の趣旨を奉戴し更に総督府に於ける朝鮮語奨励の趣旨那辺に在るかを考察し国語普及の促進上將た心と心との融合上各の分野に於て朝鮮語研究の要ありと信じます。」

成玟珂は、大正期における朝鮮語会話書の目的及び内容として、7点を挙げ、「在朝日本人の円滑な職務遂行のため」、「内鮮一体・同化のため」、「日本人の利益の拡大」、「朝鮮の事情を知るため」、「日常生活への活用のため」の5点で上のようなトーンの山本の学習書の斯様な序や例文も挙げてその根拠としている⁶⁷⁾。また、「(前略)朝鮮語会話書名の変化からは、朝鮮に対する日本や日本人の意識の変化とともに、朝鮮語会話書の目的が「隣[ママ]国との交際」から「兵用」へ、そして「意思疎通」や「内鮮一体・同化」への推移が読み取れる。」⁶⁸⁾と結論付けている。しかしながら、ここには朝鮮語を教えるという営為が生活の糧・職業・商売である、ひいては人は誰も自らのより豊かな物質的・精神的生活を追求するものであるという観点が欠如している。このような観点を念頭に置くと、『最新朝鮮語会話辞典』の序に代表される山本の執拗なまでの朝鮮語有用論や『増訂(独修)朝鮮語会話 全』や『朝鮮語研究』への試験問題の

62) 稲葉 (2005: 345)

63) 稲葉 (2005: 345)

64) 石田 (2012: 14-15)

65) 稲葉 (2005: 336)

66) 総督府属時代の山本 (1920) でもすでに、「(略)朝鮮人全部が国語を自由に解し得る迄には前途猶多数の歳月を要す朝鮮人の全部が国語を解し得る日を待つよりも寧ろ此際内地人は率先鮮語の研究に努力し以て総督政務総監閣下の力説せられたる訓示の趣旨に副はむことを切望して已まざる次第なり。」と述べている。

67) 成 (2013: 278-284)

68) 成 (2013: 287)

採録も、自己の存在価値・存在意義の正当性の主張、販売促進・商売繁盛のスローガンとして再解釈することも可能である。

上述の京城高等商業学校の例に見られる社会状況のように、学校教育での朝鮮語の地位・需要の低下と相俟って、山本は新たな人生行路を切り拓く。1931(昭和6)年、40歳にして高等文官試験行政科に合格し、教育行政の管理職、すなわち高級官僚としての道を歩みだす。これは、先行きが不安定な朝鮮語を日本人に教える朝鮮語教師より、たとえ任地が気候その他の生活条件の厳しい会寧に代表される地であれ、教育行政の管理職、すなわち高級官僚という職業のほうを選択したということである。これには「高等商業学校長から商業学校長へという教員人事ルートが存在し、彼らの間には元京城高等商業学校教授どうしの連携プレーが見られた」⁶⁹⁾という人脈も要因として作用しているよう。こうして、3.2の「葉書回答」のような各界の名士へのアンケートの対象者となっているように、商業学校等の校長という教育行政の管理職として栄達の道を歩んだのである。

商業学校校長となって以降、もちろん運用能力が消え去るわけではないが、使う必要のなくなった朝鮮語は山本の中にしまわれ、山本と朝鮮語の関わりが表立って見られなくなる。ことに引き揚げ後は顕著である。変わらず教育行政の管理職として栄達の道を歩んでいくのだが、前出の「又教育長としては、教育行政官や商業高等学校長等を歴任したことのある私が戦災直後昭和二〇年一月以来、市の学務課長、教育部長の職にあつたので、初代教育長として任命され今日に至つたのである。」(下線:植田)⁷⁰⁾といったプロフィールの記述には、朝鮮語はおろか、下線部の舞台が朝鮮であった形跡すら見出せない。異文化との接触によって身につけた朝鮮語は、いわば着脱可能なアイテムだったと見做すことができる。山本の人生行路において、朝鮮語の学習・習得は、後の高等文官試験受験と同一線上にある、人生における栄達、より豊かな物質的・精神的な生活への足掛かりと見做すことができるのである。

5. おわりに

本論文ではまず、山本正誠の読みが「やまもと まさのぶ」である可能性が高いことを明らかにした。次に、山本の人物史と著書等について可能な限り解明した。さらに、これらに基づき、山本が朝鮮語(や朝鮮)を足掛かりとして自らの人生を切り拓いていった後、高級官僚に転身して朝鮮語から離れることによってさらに栄達の道を歩むことになったことを明らかにし、「人物史主義」・「原物主義」に基づく新たな山本の姿を浮かびあがらせた。

4章で言及した、東京外国語学校朝鮮語科の先輩で朝鮮総督府に学務官吏として勤めた奥山仙三は、敗戦直後に学務局の元上司・関屋貞三郎に宛てた書簡で「永年努力の甲斐も今は無駄

69) 稲葉 (2005: 348)

70) 山本 (1953: 52)

となりムザムザとソ聯や米奴のために半島を奪はるゝかと思へは洵々九腸寸断の情を禁じ得ず候」,「居残つて何か日鮮[ママ]間の為に仕事をなす覚悟を定め居り」と吐露している⁷¹⁾。このような「恨み節」は奥山が総督府の官吏として勤め続けつつ、朝鮮語(や朝鮮)から離れずに人生を歩んだ帰結である。

一方、山本正誠は、人生を切り拓く着脱可能なアイテムとして朝鮮語を身に着け、それを利用して職を得るも、高級官僚への転身を機に朝鮮語(や朝鮮)から離れることによって、より豊かな物質的・精神的生活を求め、さらなる栄達への道を歩み、敗戦後にはいち早く郷里で朝鮮との関わりの片鱗すら見せずに教育界の名士として晩年を送った⁷²⁾。このような朝鮮語との関わり方は薬師寺知^{ともひで}にも共通するものである⁷³⁾。薬師寺は、仁川で『朝鮮新聞』の記者や主筆として活動した後、江景で韓南学堂を経営するなど教育に携わり、その間、『文法註釈韓語研究法』(1909/明治42年)を執筆・刊行するも、その後、朝鮮語(や朝鮮)から離れ、別府の地獄めぐりで観光プロデューサーとして成功を収めた。薬師寺の場合もまた、別府に移って以降は朝鮮語(や朝鮮)との関わりの形跡すら見られない。すなわち、たとえ山本や薬師寺自身の中に朝鮮語が存在しているとしても、ひと度離れてしまえば、アイテムとして不要になった朝鮮語がわかるということをあえて表出する必要はなくなるのである。

朝鮮語という異文化に接触した時、着脱可能なそれから離れるか否かによる差異の一例を彼らの人生行路の軌跡は示している。

引用文献

*朝鮮名は日本漢字音により配列した。

阿部薫[編輯兼発行者](1935)『朝鮮功労者銘鑑』民衆時論社(韓国・国立中央図書館デジタル)

石田純郎(2012)「京城医学専門学校の生徒と教授」『医学史研究』94, 医学史研究会

泉孝英(2009)『外地の医学校』株式会社メディカルレビュー社

稲葉継雄(2005)『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』九州大学出版会

猪野三郎 監輯(1925; 1937¹²⁾『第十二版 大衆人事録』帝国秘密探偵社国勢協会(芳賀登 他 編集『日本人物情報大系』75, 皓星社, 2001年)

茨城県立太田第一高等学校同窓会(1950)『同窓会名簿(昭和二十五年三月調査)』茨城県立太田第一高等学校同窓会

71) 植田(2016: 109)

72) なお、山本は社会での栄達の方、この間、家庭を築き、3人の娘を育て上げて、5人の孫に恵まれてもいる(猪野1925; 1937¹²: 37, 野田1964: 640)。

73) 薬師寺については、植田(2011)で論じた。

- 茨城県立太田中学校同窓会（1933）『同窓会名簿（昭和八年十月調査）』茨城県立太田中学校同窓会
- 植田晃次 他（2006）『朝鮮語教育史人物情報資料集』植田晃次
- 植田晃次 他（2007）『日本近現代朝鮮語教育史』植田晃次
- 植田晃次（2009）「『講義録』という形態から見た『朝鮮文朝鮮語講義録』の異本とその生成過程」『延辺大学学報（社会科学版）』42増刊，延辺大学学報編集部（植田 他 2011に再録）
- 植田晃次（2011）「薬師寺知囃—別府地獄めぐりと朝鮮語をつなぐ人—」『言語文化研究』37，大阪大学言語文化研究科
- 植田晃次 他（2011）『学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史』植田晃次
- 植田晃次（2012）「明治期朝鮮語学習書・伊藤伊吉『独学韓語大成 全』の書誌学的研究」李東哲・権宇 主編『日本語文化研究』2（下），延辺大学出版社
- 植田晃次（2014）「金島苔水と朝鮮語」李東哲 主編『日本語文化研究』3（上），延辺大学出版社
- 植田晃次（2015）「本田存と朝鮮語—日本近代朝鮮語教育史の視点から—」（第66回朝鮮学会大会，2015年10月4日，於天理大学）口頭発表資料
- 植田晃次（2016）「奥山仙三と朝鮮語—編纂した朝鮮語学習書の性格に着目して—」李東哲・権宇・安勇花 主編『日本語文化研究』4（上），延辺大学出版社
- 大内捨次〔編集発行印刷人〕（1948）『いはらき人事録』いはらき新聞社
- 小貫健（1910）「外国語学校入学志願者のため」宮田（1910）所収
- 金島治三郎（苔水）（1904; 1904³）『学理実験 催眠術』石塚書店（発売元）（Kindle版）
- 株式会社日本名簿出版（1991）『同窓会会員名簿（平成3年1月）』茨城県立太田第一高等学校同窓会名簿刊行委員会
- 櫻井義之（1979）『朝鮮研究文献誌 明治大正編』龍溪書舎
- 仙波藤光（1969）『昭和44年度版茨城紳士録 茨城人名録』茨城新聞株式会社
- 成玟珂（2013）「大正時代における朝鮮語会話書の特徴」『日本学報』97，韓国日本学会
- 高尾茂（1990）『馬頭ヶ丘—京城医学専門学校昭和十二年卒業五十周年記念誌』昭十二会朝鮮研究社 編（1937）『新興之北鮮史』朝鮮研究社（韓国・国立中央図書館デジタル化資料）
- 東京外国語大学史編纂委員会（1999）『東京外国語大学史』東京外国語大学
- 日外アソシエーツ（2004）『人名よみかた辞典 名の部 新訂第3版』日外アソシエーツ
- 野田光春・竹内昱之助〔調査 編集人 製作〕（1958）『昭和三十四年度版 茨城紳士録』いはらき新聞社
- 野田光春〔調査 編集 製作人〕（1964）『昭和三十九年度版 茨城紳士録』いはらき新聞社
- 宮田朝次郎（1910）『会報』茨城県立太田中学校益習会
- 山田寛人（2004）『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版

- 山本正誠（1920）「諺文（언문）に就て」『朝鮮彙報』大正9年5月号，朝鮮総督府
- 山本正誠（1953）「水戸市教育委員会のあゆみ（わが教育委員会（65）」『教育委員会月報』5（5）（No.36），文部省
- 山本正誠（1959）「偕楽園」『水戸学研究』昭和34年第1号（通巻66号），水戸学研究出版部
- 李康民（2015）『近代日本の韓国語学習書』亦楽〔朝鮮語〕
- 渡植彦太郎（1959）「私の学問放浪記」『富大経済論集』5（1），富山大学

〔附記〕

本論文の執筆にあたり，多くの関係機関のご協力・ご援助を，また，査読者お二方から有益なコメントをいただいた。感謝申し上げます。

本研究はJSPS 科研費 JP26370726の助成を受けたものである。また，JP17320085・JP20320081・JP23520671により得た知見の一部も含まれている。

山本正誠年譜

日付	年齢	山本の出来事	社会の出来事
1891 (M24). 1. 25	0	茨城県に森山崇徳の五男として生まれる。後、山本三三の養子となる。	
1894 (M27). 8. 1	3		日清戦争開戦 (~1895. 4. 17)
1904 (M37). 2. 10	3		日露戦争開戦 (~1905. 9. 5)
1909 (M42). 3. 26	18	茨城県立太田中学校卒業	
1910 (M43). 8. 22	19		韓国併合
1910 (M43) 現在	19	士官学校志望 (当時, 森山姓)	
1913 (T2).	22	明治大学本科英文科三年修了	
1914 (T3). 3. 28	23	官立東京外国語学校本科朝鮮語科卒業	
1914 (T3). 4. 9	23	朝鮮総督府雇員・内務局第一課勤務	
1914 (T3)	23		第1次世界大戦開戦
1915 (T4). 6. 30	24	朝鮮総督府属に任ぜられる	
1915 (T4). 8. 25	24	『朝鮮語会話 全』初版発行	
1915 (T4). 11. 1	24	『朝鮮語会話 全』再版発行	
1916 (T5). 5. 28	25	『朝鮮語会話 全』3版発行	
1917 (T6). 4. 25 (30?)	26	『朝鮮語会話 全』4版発行, 増訂に関与か	
1917 (T6). 10	26	『朝鮮の俚諺に就て』	
1918 (T7). 5. 10	27	『朝鮮語会話 全』5版発行	
1918 (T7). 9. 19	27	私立東洋協会京城専門学校朝鮮語講師を嘱託	
1919 (T8). 3. 1	28		三一独立運動
1919 (T8). 7. 1	28	第2回判任官見習講習会で李完応とともに朝鮮語を担当	
1919 (T8). 12. 3	28	『朝鮮語会話 全』6版発行	
1920 (T9). 4. 15	29	朝鮮総督府を退職	
1920 (T9). 4. 15	29	私立東洋協会京城専門学校教授 (1920. 5. 1高等商業学校に改称) ⁷⁴⁾	
1920 (T9). 5	29	『諺文 (언문) に就て』	
1920 (T9). 8. 26	29	『増補 (独修) 朝鮮語会話 全』増訂7版発行	
1921 (T10). 2. 8	30	京城医学専門学校朝鮮語講師を嘱託 ⁷⁵⁾	
1921 (T10). 4. 16	30	京城工業専門学校朝鮮語講師を嘱託 (1922. 3. 京城高等工業学校に改編)	
1921 (T10). 5. 25	30	『新新朝鮮語会話』(初版印刷東京版) 初版発行	
1921 (T10)	30		朝鮮語奨励試験開始
1923 (T12). 1. 10	31	『新新朝鮮語会話』(初版印刷東京版) 訂正3版発行	
1923 (T12). 2. 5	32	『朝鮮語研究』初版発行	
1923 (T12). 5. 11	32	朝鮮総督府京城医学専門学校教授を兼任	

74) 1921~1931, 1922, 4~1932, 3, 1922~31年度とするものあり。

75) 1922・1927~1931, 1923, 5~1932, 3とするものあり。

1923 (T12). 9. 1	32		関東大震災
1923 (T12). 10. 1	32	『朝鮮語研究』再版発行	
1924 (T13). 2. 10	33	『朝鮮語研究』3版発行	
1924 (T13). 4. 15	33	『最新朝鮮語会話』（初版印刷京城版）初版発行	
1925 (T14). 6. 25	34	『最新朝鮮語会話辞典』初版発行	
1925 (T14). 7. 10	34	『最新朝鮮語会話辞典』再版発行	
1925 (T14). 7. 20	34	『最新朝鮮語会話辞典』3版発行	
1925 (T14). 7. 30	34	『最新朝鮮語会話辞典』4版発行	
1928 (S3). 11. 5	37	『最新朝鮮語会話』（初版印刷京城版）再版発行	
1928 (S3). 11. 16	37	昭和三年勅令第百八十八号の旨により大礼記念章を授与	
1928 (S3). 12. 20	37	『朝鮮語研究』4版発行	
1930 (S5) 年度	39	少なくともこの年度に京城高等工業学校で教える	
1930 (S5). 10. 11	39	『最新朝鮮語会話』（初版印刷京城版）7版発行	
1931 (S6)	40	高等文官試験行政科合格	
1932 (S7). 3. 29	41	朝鮮公立実業学校長に任ぜられる	
1932 (S7). 3. 29	41	会寧公立商業学校長に補される	
1932 (S7). 4. 4	41	朝鮮公立実業学校教諭を兼任	
1932 (S7). 4. 4	41	会寧公立商業学校教諭に補される	
1933 (S8). 12. 10	42	『最新朝鮮語会話』（初版印刷京城版）8版発行	
1935 (S10). 3. 30	44	元山公立商業学校長・教諭に補される	
1936 (S11). 5. 20	45	『朝鮮語研究』5版発行	
1938 (S13)	47		第3次朝鮮教育令公布
1939 (S14). 4. 1	48	仁川公立商業学校長・教諭に補される ⁷⁶⁾	
1945 (S20). 4. 1	55	仁川公立女子商業学校長・教諭に兼補される ⁷⁷⁾	
1945 (S20). 8. 15	55		第2次世界大戦終結
終戦後	55	引き揚げ	
1945 (S20). 11～	55	水戸市学務課長, 社教課長, 教育部長 教育長等を歴任	
1946 (S21)	56	水戸市主事に就任	
1948 (S23)	58	機構改正により教育部長兼学務課長, 社会教育課長	
1948 (S23)	58	教育長講習を修了	
1950 (S25). 3 現在	60	水戸市役所総務部学務部長	
1952 (S27). 11. 1	61	水戸市教育委員会教育長 (～1956. 9. 30)	
1958 (S33). 11 現在	67	義烈館主事兼館長	
1959 (S34). 4. 10 現在	68	義烈館主事	
1964 (S39). 1	73	常盤神社義烈館長補佐	
1991 (H3). 1 現在	—	物故者	

76) 1939～43年度, 以後不明とするものあり。

77) 1945. 5～朝鮮公立中学校長とするものあり。